

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2893900015		
法人名	社会福祉法人 勝心会		
事業所名	グループホーム 清音【せせらぎユニット】		
所在地	兵庫県赤穂郡上郡町與井42-1		
自己評価作成日	平成23年3月17日	評価結果市町村受理日	平成23年5月30日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2893900015&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 姫路市介護サービス第三者評価機構		
所在地	姫路市安田三丁目1番地 姫路市自治福祉会館6階		
訪問調査日	平成23年4月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「和」の温もりが感じられる構造となっており、防災設計がなされ消防設備(スプリンクラー)も充実している。また、消防署と整形外科病院が隣接しており、緊急時の対応も迅速に行える場所に建設されている。生活内では、通常の事業所内サービス以外に、音楽療法士による週2回の回想セラピー、隣接されている整形外科病院からの往診(整形外科、皮膚科)、外傷後処置等のための看護師の訪問、理学療法士による訪問リハビリ、協力歯科医院からの週1回の往診が受けられる。その他、個別での対応により月に1~2回程度の外食の機会を提供している。また、趣味の継続支援として、塗り絵作品展示や毛筆による日めくりカレンダー作成の支援を行っている。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今回の評価では各ユニットのリーダーが自己評価を行い管理者がまとめたが、事業所自らが課題を抽出し改善に向けて取り組む姿勢がみられた。管理者は「今回の評価までに課題を解消する」と厳しく方向性を示していた。管理者と若くやる気のあるユニットリーダー、そして利用者と寄り添える職員が見られた。町内には他にグループホームがないため専門性をもつ業務ながら職員の研修や交流の機会が確保できなかったが、前年度から隣接する相生市の4つのグループホームからの誘いで事業所交流や交換研修の機会ができ職員の資質の向上に結びついた。事業所には専属の音楽療法士が配置され季節に応じた癒しの音楽が常に事業所内に流れていた。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

(セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。)

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者、家族、地域住民を見据えた法人の理念があり、週に1回の唱和を行いながら理念を意識するよう取り組んでいる。	事業所は地域密着サービスの意義をふまえた法人理念の実現のため、「マンパワーの質を上げる」という方針を掲げ職員の意識改革を進め成果を伴っている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	昨年と比べて利用者が地域へ出かける回数は増えたが、地域の方がホームへ来訪する回数は少ない。	町全域を地域と捉え行事等の交流も定着しつつあるが、活動場所を探していた4～50代の町の有志による「傾聴ボランティア」と随時「遊びに来る」という感覚で交流ができています。	立地場所としては地域に馴染み難いが、日々の散歩や挨拶等で地域へより一層理解される事を期待したい。また、子ども達との交流も取り組みとして期待したい。
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ボランティアや実習生の受け入れを行うことでは認知症ケアの手法の伝達に関して貢献できていると思われる。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議録による報告を議事録にてユニットリーダーには確認を促してはいるが、スタッフ全員が周知しているわけではない。	2ヶ月に1回開催できている。委員も事業所開設当初からの家族代表、地域代表と1年で交代する町の健康福祉課課長の出席があり、堅苦しくない雰囲気でき意見交換ができています。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村担当者が運営推進会議のメンバーにも選出されており、円滑な情報交換は行われている。	運営推進会議に町の健康福祉課課長の出席があり事業所理解とともに情報提供を受けたりしている。管理者は町の地域包括支援センターが開催する事業者連絡会にも参加している。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月開催されるホーム内の会議において、身体拘束・行動制限に関する討議を行っている。	職員の全体会議で年に1回は研修を行っているが、職員個々の理解では正確な「身体拘束をしないケア」の理解に不十分な場面や気づきができていない事がある。	管理者および職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を今一度正しく研修し、「身体拘束をしないケア」を職員全員が正確に理解し取り組めることを期待したい。
7	(6)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	あくまで自己研鑽レベルでの学習を行っている。理念にも掲げられている人権に対する意識を個々のスタッフが持っているが、一部では言葉の暴力ともとれる言動が放置されている実情もあり、完全に人権に対する意識があるとは思えない。	実際の虐待はないが、職員同士での連携や指導が不十分な部分もあり今後の課題としている。	認知症介護での専門職として人権意識をしっかりと養い、チームケアの重要性を理解し職員間で相互の支援ができる体制を構築する事を期待したい。

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	あくまで自己研鑽レベルでの学習を行っているが、実践レベルまでには到達していない。	職員はそれぞれに制度の概要はほぼ理解できているが、職員個々で差がある。	管理者は職員全員が日常生活自立支援事業や成年後見制度について事業所内で正確に学ぶ機会を提供し、それらを活用できるように支援する事を期待したい。
9	(8)	契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時に文書を用いて口頭にて丁寧に読み上げながら説明を行い、同意を得ている。	家族等が不安に思う状態低下時の対応や緊急時の医療対応、法人内での特別養護老人ホームとの連携等で生活場所に困らないように支援する事も説明して納得を得ている。	
10	(9)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	なじみの関係、なじみのスタッフにより意見や要望等は話しやすい雰囲気が作られている。また、訪問カードを用いての意見収集も行っている。	家族によって思いの違いもあって以前は事業所への不審もあったが、現状では職員は家族からの信頼も大きく意見も聞けて運営に反映できている。	
11	(10)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常や会議においても積極的に意見を収集できるよう心がけてはいるが、積極的かつ建設的な跳ね返りはなく、積極性は伝わっていない。また、運営に対する意見と愚痴をはき違えている風土も否定できない。	意見は職員間で信頼のある各ユニットリーダーが取りまとめて管理者に伝えてくる。管理者自身も職員からの信頼は大きいも、職員のより積極的な意見が増える事を期待している。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人員配置的には厳しく、配置の偏りを感じている意見が多いが、日勤帯の人員確保は各々の負担軽減を目指して調整を行っている。また、労力に見合った賃金・やりがいは十分ではないように思われる。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々での資格取得が積極的に行われている。また、法人内研修への参加や前年度と比較しても外部研修への参加機会を多く持っている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	相生市グループホームとの連携により、スタッフの交換研修を行った。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	それぞれの利用者に対して担当のスタッフが付くことにより、馴染みの関係作りができるよう関わりを持っている。		
16			初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前の面接も含めて、入所契約時による面談時にゆっくりと希望や不安等について話し合いを行っている。		
17			初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現状利用できるサービスについては利用説明を行っている。		
18			本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	各利用者の状態を見極め、それぞれに合った役割を提供している。		
19			本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の面会は多く見られ、受診等にも積極的に関わっており、不定期ではあるが家族交流会も実施できている。		
20	(11)		馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	いきつけの美容院への外出やお墓参り等、入所前と変わらず継続している。	馴染みの散髪屋や美容院への対応は原則家族対応ながら、状況によって事業所対応も行っている。墓参り対応などで利用者が感無量で涙する事もあり関係継続支援にやりがいを感じる。	
21			利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事は必ずリビングで食事するようにしており、日中も孤立を防止するために居室に入りっぱなしにならないよう、また、それに伴った利用者同士の口論やトラブルが発生しないよう人間関係に配慮した支援を実施している。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年度の退所は同法人特別養護老人ホームへの転居のみとなっており、事後の情報収集や情報提供は随時受けている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当者を中心に会議においても意見交換を実施している。	前回の評価から思いや意向を把握するための基となる生活歴や好きなこと、得意なことなどの記録として「アセスメント要約表」を作成し計画作成担当者を中心に活用し情報を共有している。	
24			これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の面接時から情報収集を行い、取り得た情報は書面に残して全てのスタッフで共有できるようにしている。		
25			暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	スタッフが絶えず見守りを行い、それぞれの状況把握を行っており、特変事項があればすぐに対応を行っている。		
26	(13)		チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族からの聞き取り、担当者の意向、カンファレンスを行い、作成担当者により介護計画を作成している。	介護計画は利用者、家族の思いを反映させ作成し、見直しも基本は6ヶ月を目安にしている。入院等では2~3ヶ月の間隔でも随時作成し、モニタリングも職員の成果の満足度も含めて実施している。	
27			個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録はいつでも誰でもが入力できるシステムとなっており、その情報を皆で共有している。		
28			一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	行事、外出、受診等さまざまな場面で状況に合わせた対応を行っている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29			地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	かかりつけ医に関する資源把握はできているが、細部までの情報共有まではできていない。		
30	(14)		かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今までの医師からの医療を継続できるように通院等も行っている。状態に変化があれば電話によりすぐに対応を行っている。	ほとんどの利用者が入所時のかかりつけ医を継続しているため、家族と事業所が連携して受診の支援を行っている。また、医師との連絡調整も事業所が率先して行っている。	
31			看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同法人の特別養護老人ホームの看護師との相談体制はあるものの、隣接している岡田整形外科への相談実施のほうが現実的であり相談・連絡を行う事はほぼ無い。		
32	(15)		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時に個別の情報シートの提供を行っており、入院後の面会についても積極的にやっている。	利用者は認知症のため遠方の完全看護対応病院に入院することがほとんどだが、事業所は職員の協力を含め週に1回は面会に行きり八ピリや情報収集を早め行って退院に支障がないように病院と協働している。	
33	(16)		重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	同法人の特別養護老人ホームとの連携により、重度化した場合は所定の手順により速やかに転居できるよう支援している。	重度化や終末期に向けた指針については文章化までには至っていないが、職員間ではどの状態までなら対応できるか等を話し合い、生活レベル範囲は対応し入浴に利用者が苦痛を伴うように思える時を限界としている。介護力の向上も課題としている。	
34			急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のフローチャートを備えて対応できるよう体制を取っており、AED講習への積極的な参加を行っている。		
35	(17)		災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	選任の防火管理者を配置し、年に2回消防避難訓練および水害時の避難訓練を行っている。	火災対策は事業所の隣に消防署が隣接し、事業所自体も防災設備やスプリンクラーが設置されている。避難訓練も年2回実施し、地域では集会所等もなく事業所が避難所として申し出ている。	

自己	者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃の会議等で言葉による行動制限についても討議を行っているが、意識はスタッフによって差がある。	管理者はグループホームの生活の主体である利用者を支援する際、職員が利用者の人権、認知症ケア等を専門職として自己覚知し、また人と人のかかわりとして支援することを大切にして質の向上を求めている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	イベントや外出は可能な限り利用者からの要望に合わせるように配慮している。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間、食事開始時間、入浴等の時間の強制はしていないが、それが利用者の意図通りかと言われると明確な根拠は得られない。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしさを維持するために、入所時の衣類は馴染みの物を持参してもらい、追加購入分は本人との外出により自己決定の場を提供して衣類を購入している。		
40	(19)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材調理への参加可能者が減少しているが、その他の掃除やテーブル拭き等の役割を提供している。	食事は、職員が各利用者の嗜好をねぎの量等の細かいところまで把握しおいしい食事を提供するという思いをこめて3食を調理している。利用者も手伝い、片付けを自主的に行い食事を楽しんでいる。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量を個別に記録しており、それを基に必要摂取量が確保できるよう関わっている。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、それぞれの居室の洗面台にて口腔ケアを実施している。		

自己	者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	極力おしめの使用を避けながら、個々に合わせた排泄介助方法により関わっている。	入院時等しかたなくおむつ使用になった利用者も、事業所ではおむつ使用の弊害とトイレでの排泄の利点をその都度検討し、自立に向けて取り組んでいる。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の管理や内服薬の状況を見ながら、日頃の様子観察を行い排便チェックを随時行っており、必要があれば主治医への相談を実施している。		
45	(21)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の希望を基本にはしているが、スタッフ本位の入浴時間となっている実情は否定できない。	現状は午後入浴対応であるが、今後は午前・午後に入浴時間を変更し利用者が毎日、全員が入浴できるように対応する。また入浴剤を随時使用したり、職員との個別のかかわりで入浴を楽しんでいる。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動レベル、前夜の睡眠状況等に配慮しながら、その人のペースに合わせた睡眠時間で休めるように心がけている。		
47		服薬支援 一人ひとり使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の説明書を利用者毎にまとめており、いつでも確認できるよう保管しているが、誤薬事故が見られた。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や余暇活動で塗り絵や読書をする利用者は見られるが、レクリエーションの提供は少ない。		
49	(22)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	外出希望があれば、本人・家族・担当者と相談をしながら可能な限り実現できるよう取り組んでいるが、重度化により一部利用者に偏りつつある。	週に2～3回は買い物外出で新鮮な野菜の購入や鮮度の良い刺身等品物によって行き先が変わり、特にペットボトルや発砲スチロールのトレイ等をリサイクルボックスに持って行っている。散歩は天気によって随時対応し、ドライブも月に1～2回は出かけている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			<p>お金の所持や使うことの支援</p> <p>職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している</p>	現金を所有している利用者があり、実際の買物により地域でお金を使用する機会を設けている。		
51			<p>電話や手紙の支援</p> <p>家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている</p>	電話希望時は即座に対応し、家族と会話ができるよう関わっている。		
52	(23)		<p>居心地のよい共用空間づくり</p> <p>共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	落ち着いた空間と柔らかな光のある環境で落ち着いて過ごすことができ、見晴らしの良い窓から見える景色から季節感を感じられる話題を提供している。また、季節によって室内の飾り付け等も変化させている。	新たに事業所の屋外玄関前を憩いの場として舗装し居心地のよい共用空間を増やした。建物は千種川が近くにあり自然に恵まれた環境の中にあり白を基調として内部も明るい。利用者の手作り習字カレンダーもあり和める。	
53			<p>共用空間における一人ひとりの居場所づくり</p> <p>共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている</p>	リビング内にテーブル、ソファ、和室があり、それぞれが思い思いの場所で過ごせるようになっている。		
54	(24)		<p>居心地よく過ごせる居室の配慮</p> <p>居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	居室には入所前の馴染みの家具を搬入し、家族等の写真も並べている。	居室の入り口は和風の引き戸で落ち着いた雰囲気があり、使い慣れた筆筒や引き出し、椅子や机なども置かれ個性豊かな居室になっている。居室の表札は担当職員と手作りである。	
55			<p>一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり</p> <p>建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している</p>	高齢者においても使いやすい調理機器やトイレが備わっているものの、完全なバリアフリー設計ではなく玄関にも小さな段差がある。		